

# 部活動の外部指導員として求められること

吹奏楽外部コーチ 牧野 早央里

近年、部活動の指導を外部講師に依頼する学校が増えている。

依頼される指導者は、吹奏楽部にフォーカスを当てると、音楽の授業のみを担当し、複数の学校を掛け持ちしている教員、元学校の教員から現役音楽家、現役演奏者からは引退したが、指導者として活躍する方まで様々だ。

教員現場に直接関わる機会が少ない場合、どのように子ども達と関わるべきか。

部活動とはいえ、多感な時期に当たる学生とのやり取りは、悩むことも多いはずだ。

また、地域活動ではなく、学校の部活指導者として、指導に入ることもあるだろう。

その場合、部活動は学校教育の一環として考えられるため、技術的な指導だけではなく、道徳的指導や、心のフォローを求められることもあるだろう。

ここでは、私自身の経験や周囲の指導者との会話であがったことなど、事例を交えて指導員に求められることを考えていく。

## 外部指導員としての実例

### 実例1 不登校の学生

不登校にも様々なパターンがある。

ここでは授業には参加できない、クラスに入れたい、でも部活動には参加したい、そのような生徒との関わりを実例としてあげる。

生徒が不登校でも、部活動に参加を希望する気持ちとして、どのようなパターンが考えられるだろうか。

#### パターン1

- ・クラスで仲が良かった友達のグループから外れてしまい、行きたくなくなった
- ・楽器や音楽が大好き
- ・部活動が生きがい、学校生活での心の拠り所となっている

この場合、同じクラスのメンバーが部活内に在籍していたとしても、部内の対人関係には大きな問題はない、もしくは他学年との関わりがあり、その中で人間関係が構築できていることが多いため、出来れば部活動だけでも続けた方が良いと感じる。

もちろん、担任の先生や、学年主任との相談は必要だが、少しでも学校に来る楽しみがあることに意味があるパターンではないだろうか。

実際、練習を頑張ることにより、部活動の中でクラス以外の同学年と仲を深まることができた。結果、翌年のクラス変更をきっかけに授業にも参加できるようになり、無事卒業まで在籍することが出来た。

## パターン2

- ・朝起きることができなくて学校に行けない
- ・クラスの中で孤立している訳ではなく、話せる友達もいる
- ・楽器と音楽が好き

パターン1と同じところもあるが、大きな違いは本人の生活習慣の改善が必要な点が大きな違いだ。この場合、担任や学年主任に加え、保険教員との連携も大切になるだろう。

また、朝起きられない原因も様々あるだろう。

しかし、パターン1とは異なり、部活動に参加することにより他の問題が解決する可能性は低い。

パターン2の場合に部活動だけを許可することは、甘えになることも考えられる。

部活動は学校教育の一環のため、まずは他を見直し、改善が見られたら部活動に参加できることを励みにすることが良いのではと考える。

## 実例2 部活動の中での、ご家族との関わり

部活動において、ご家族の協力は必要不可欠だ。だが、どこまで関わっていただくかは非常に難しいところだ。

例えば、子どもが何か悩みを抱えたとき、ほとんどの親が、何とかして解決に導こうとするだろう。時には学生ではなく、ご両親から代弁されることもあるだろう。子どもが悩み、何か私たち講師に伝えたいとき、できれば本人の言葉で聞き、解決策を共に考えたい。

だが、自分の気持ちを自分で伝えることが苦手な子もいる。

いかにご家族を安心させ、信用していただき、時間はかかっても、じっくり子どもから話してもらおう。このような時、これが1番大切だと思う。

この学生は、結果、自分の口から発言することを繰り返すことにより、数年後には、しっかり自分の意見を述べながら、同じような後輩の気持ちも汲み取れる素敵な先輩になった。

これは道徳教育にも関わることではないだろうか。

技術的な指導以外も求められることを痛感した事例である。

## 量より質

ガイドラインの改訂や、時代の変化と共に部活動の時間が大幅に減った学校は、決して少なくないだろう。

また、部活の活動費用を生徒から集めている学校は、部員の減少により、部費を賄うことが厳しく、パートレッスンの回数を減らさざるを得ない状況のところもあるだろう。

楽器の修理費が賄えず、直さなければならない、買い換えなければならないと分かっているにもかかわらず、それが叶わない学校もあるだろう。

このような状況で、外部講師としてできることを考えてみる。

### 1. パートレッスンに関して

多くの学校が、コンクール前、または定期演奏会等の大きなイベントの前にレッスンを入れたいと考えているだろう。

指導者の立場からすると、直前の変化より日々の基礎を大切にされた方が良くと考え、出来ればイベントシーズンに関わらず定期的にレッスンを組むことが理想である。

しかし、それが叶う学校が少ない現状、どのような解決策があるだろうか。

個人的に外部レッスンに通える生徒は恵まれている。

学校でしかレッスンを受ける機会がない場合、一回一回のレッスンは非常に大切な時間のはずだ。

その場で講師は一つでも多くのことを伝え、身になって欲しいと願って指導するだろう。

これはあくまで私自身のやり方だが、レッスン中レッスンをとる時間と、振り返る時間を度々設ける。そして、ふりかえりの時間で、今すぐ出来るかはさせておき、理解しているか、必ず確認することにしていく。

また、コンクールシーズン等で、出場メンバーのみがレッスンを受講して、後輩が受けていない場合、そのメモを共有することを薦めている。

そうすることで、レッスンを受けていない生徒に少しでもレッスンの内容を伝えることができ、先輩は後輩に今得た知識を伝えることで、より理解を深める時間を得ることができる。

欲を言えば、年に一回しかレッスンがない学校は、このメモを定期的に見返すことで、再度基礎を見直すことができ、いつの間にか自己流になっていた奏法をなおすきっかけとして欲しい。

このように振り返りの時間を多く持てば、一回のレッスンの価値も上がり、翌年レッスンに伺う際に、さらにレベルアップに導くことができる。

## 2. 修理に関して

こちらも本来であれば定期的に確認したい事項だが、実際はなかなか難しい。

管楽器の個人持ちの場合、特に木管楽器であれば理想は半年に一度、最低でも年に一度は壊れた自覚がなくてもメンテナンスに出すことが重要だ。

正直、壊れてから出すのでは楽器への負担も金銭的負担も大きい。

予算が限られる場合、修理の優先順を外部指導員に委ねられることも珍しくない。

だからこそ、修理はできないにしろ、ある程度の応急処置や、知識は身につけておくべきだと考える。もし、一回だけでもリペアマンを学校に呼ぶことが出来るのであれば、そこで一度に見積もりを出し、見積書と睨めっこしながら優先順位をつけることも可能だろう。

楽器が壊れた場合、応急処置できることもあるが、指導者用の講座に参加したり、専門書、また近年であればYouTubeやSNSから知識を得ることもあるだろう。

このように、ある程度の知識を身につけることは現代において難しい問題ではなくなりつつある。

だが、知識があることと、実践できることは、また別である。

学校の備品ならまだしも、個人もちの楽器ほど怖いものはないだろう。

リペアマンの中には現地対応は厳しいが、その場で出来る応急処置を、メールや電話越しに親切に教えてくれて、後日改めて診てくれる方もいる。

緊急の場合でも対応して頂けるリペアマンとの密な関係は普段から築き上げ、大切にしたいものだ。

## 引率することも・・・

指導員が活動する学校の部活動や、地域の活動団体には、引率者としての役割も指導員が担うことが珍しくなくなった。

そのような時、どのようなことに注意すべきだろう。

子どもたちの安全確保はもちろん、スケジュールリングや、注意事項や必要事項など保護者向けのインフォメーションやその他必要な書類の作成、場合により集金や活動費の管理、会場を使用する場合は、予約から先方との打ち合わせ、その他の雑務まで行うこともある。

コロナ禍においては、更に懸念される点が増え、指導だけするだけの時代から、危機管理や雑務まで、問題が起きた時には、臨機応変に対応出来ることが求められるような時代に変化してきたように感じる。

## 他学年との関わり

近年部員数が減り、地域の中高生と一緒に練習する機会を設けたり、中高一貫校では、同時に部活動するところも増えた。

そのようなチームでは、場合により、中学生向きに話す言葉と、高校生向きに話す言葉と分ける必要があるだろう。そうしなければ、お互い飽きが生じる可能性がある。

また、部活動は複数学年で行うことがほとんどであり、そこはいわば、社会の縮図とも言えるだろう。先輩後輩の間で上下関係が生まれ、そこには尊敬や憧れもあれば、衝突するような気持ちが芽生えることもあるだろう。

ここで得たことは、後の人生において少なからず影響することを考えれば、社会に出る前段階として、部活動や地域の活動で上下関係があるチームに籍を置くことは、教育の一環として、やはり必要なことなのではと感じる。

ある程度の人数でなければ、生まれたい関係性を考えると、子どもの人数減少により部活動を地域へ移行していくことは、こういった面からも、もしかしたら意味があることなのかもしれない。

それでは、指導員として、多学年との関わりにどのような可能性を、生み出すことが出来るだろうか。吹奏楽においていえば、楽器ごとや、セクションで組むことが多い、「パート」と呼ばれるチームが、上下関係が構築される1番小さな社会となる。

この中で、中学生であれば、敬語や年配者への対応を学ぶこともあるだろう。

先輩という立場になれば、ただ威張るのではなく、初心者にどのように伝えるのか。部内の役職に就けば、運営に関わることもある。

子どもたちはこの中で多くのことを経験して、学ぶわけだが、必要であると判断すれば、あえて試練を与え成長のきっかけを促し、時には助け舟やヒントを与えることも指導員に求められることだと思う。

## 以上を踏まえて考えられる、指導員として求められること

上記で触れたように、指導員には臨機応変な対応が、より強く求められる時代になるだろう。

群衆の力は大きく、複数人で集まる部活動や、地域活動において得られる子どもたちの成長は、計り知れない。

そういった意味で、外部指導員は技術的な指導だけでなく、道徳面においても考えるべきかもしれない。

今後、日本において子どもの人数が増えることは、少なくともしばらくは厳しいだろう。

少人数チームが増える中、いかにして子どもたちに経験と活躍の場を提供することが出来るだろうか。指導員が出来ることや、やるべきことは、まだまだあるはずだ。

今後さまざまな角度から、あらゆる可能性に着目をし、柔軟に対応する術を身につけたいと思う。

そして、子どもたちにおいて、良き指導者であり、理解者でありたい。